OP-489 山形大学における腎癌分子標的治療の使用経験

内藤 眞, 山原 教史, 中村 真由, 田村 泰之, 藤野 潔, 西田 年博, 森木 真明, 川添 久, 武藤 明紀, 加藤 健聖, 長岡 明, 喜多 浩 満

【目的】腫瘍に対して分子標的薬が用いられるようになり、その治療は大きく変貌してきている。山形大学において、ソラフェニブ、ステリニブを中心に、分子標的薬の実際を検討する。【方法】当院での分子標的治療を行った患者の治療効果、予後、副作用等について検討した。【結果】計49名の患者に分子標的薬治療を行った。ソラフェニブ使用評価可能患者14例、CR患者はいなかったが、14例全例でSD以上の効果を認め、そのPFSは8.2Mであった。ステリニブ使用評価可能患者19例のPFSは3Mであった。ソラフェニブ使用評価可能患者14例、20例中12例は期待した効果のあった症例で、その生存期間は1年以上を越えた。副作用は、比較的軽度であり、薬物投与を続けることが可能だった。【考察】腫瘍の種類は多様であり、治療法も多様であるが、腫瘍の種類や治療法によって、予後は大きく異なる。分子標的薬の使用は、腫瘍の変化を捉える手段として有用である。

OP-490 転移性腎癌に対する分子標的薬投与中の副作用の検討

内藤 真, 山原 教史, 中村 真由, 田村 泰之, 藤野 潔, 西田 年博, 森木 真明, 川添 久, 武藤 明紀, 加藤 健聖, 長岡 明, 喜多 浩 満

【目的】腫瘍に対して分子標的薬が用いられるようになり、その治療は大きく変貌してきている。山形大学において、ソラフェニブ、ステリニブを中心に、分子標的薬の実際を検討する。【方法】当院での分子標的治療を行った患者の治療効果、予後、副作用等について検討した。【結果】計49名の患者に分子標的薬治療を行った。ソラフェニブ使用評価可能患者14例、CR患者はいなかったが、14例全例でSD以上の効果を認め、そのPFSは8.2Mであった。ステリニブ使用評価可能患者19例のPFSは3Mであった。ソラフェニブ使用評価可能患者14例、20例中12例は期待した効果のあった症例で、その生存期間は1年以上を越えた。副作用は、比較的軽度であり、薬物投与を続けることが可能だった。【考察】腫瘍の種類は多様であり、治療法も多様であるが、腫瘍の種類や治療法によって、予後は大きく異なる。分子標的薬の使用は、腫瘍の変化を捉える手段として有用である。

OP-491 腹部大腺体における腎癌分子標的治療の治療経験

伊藤 文夫, 中澤 惠, 会合 信行, 巴 ひかる, 鈴木 浩次, 橋田 成司

【目的】転移性腎癌に対する分子標的薬投与を検討する。【方法】当院での分子標的治療を行った患者の治療効果、予後、副作用等について検討した。【結果】計49名の患者に分子標的薬治療を行った。ソラフェニブ使用評価可能患者14例、CR患者はいなかったが、14例全例でSD以上の効果を認め、そのPFSは8.2Mであった。ステリニブ使用評価可能患者19例のPFSは3Mであった。ソラフェニブ使用評価可能患者14例、20例中12例は期待した効果のあった症例で、その生存期間は1年以上を越えた。副作用は、比較的軽度であり、薬物投与を続けることが可能だった。【考察】腫瘍の種類は多様であり、治療法も多様であるが、腫瘍の種類や治療法によって、予後は大きく異なる。分子標的薬の使用は、腫瘍の変化を捉える手段として有用である。